

2-5 用語について

表2-5-1に本書で用いる用語の主要なものを示しました。多くは初登場の際に本文で説明し定義します。一部の用語は専門書のものとは違い、著者の感性とそれなりの理由を以て自由に決めました。そのきっかけは最初に出会った最重要語の一つである「視点」^{2・5・1}が国語の誤用であることが分かった事です。国語の「視点」は「視線の先」という意味です。視線の手元の目の位置と言う意味は持ちません。そのために別の用語を探さなければなりません。これには困惑しました。それならいっそのこと他の用語も自由に決めようと言うことになってしまいました。また、説明の便宜のために新しい用語を必要に応じて定義しました。よく調べればそのような定義語は作らなくても既にあるのかも知れません。

ただ、今後専門の文献をお読みになる読者に無用の混乱を与えないように日本図学会の用語をこの表に対照して示しました。日本図学会の用語は同会ウェブ・ページの「図学辞書（簡易版）」から採りました。この辞書は同じ意味を持つ複数の用語を収録しており、辞書の構造から対応する全ての語を拾えなかった可能性があることとお断りしておきます。この辞書は必ずしも用語の統一を強制する立場ではないように見受けられます。その寛容さを本書の用語にも適用していただければ幸甚です。

英語の用語はごく少数の資料から参考用に集めものに過ぎません。英書では著者毎にかなり自由な用語を用いているように見受けられます。

表2-5-1 透視図法用語

本書の用語 と表記	説明	英語	日本図学会 用語集から
介線	狭義には「介線法」で使う、鉛直面上に引いた45度の補助線。本書では直線とその「測線」の成す角度の二等分線であって、測線と直線の間で点列を合同で移行する「平行補助線」の途中に介在してそれを屈折させる線。それにより平行補助線の角度が自由になる。	medium line	介線

介線法	名称は狭義の「介線」を用いる作図法の意。介線法の実質は測点法において測線の方角を90度変えたものと同じ。この意味では介線を使わなくても描ける。	medium line method	介線法
画面 ²⁻⁵⁻²	スクリーンの一部を限定したものを言い、図面や絵画等の様な有限の画枠を想定する場合に用いることがある。厳密な用語ではない。	—	— (「画面」はスクリーンを指す)
仮測線	(かりそくせん)「測線」に代わり測線の役割をする線で、必要な場所に測線と平行に引く。	—	—
観測点 ²⁻⁵⁻¹	透視図の描き手の目の位置。視線の手元。中心射影の中心点。	point of eye, projection center	視点
観測点高さ	観測点と基面の距離。	eye height	視高
基線、GL	スクリーン上に表れた基面の跡、即ち、透視図上に示したスクリーンと基面の交線。	ground line	基線

(後略)